

パリで狂言指導 小笠原 匡 (51)



判を聞き付けた国際交流基金が運営するパリ日本文化会館から請われた。昨年一月から約四月月に一回、ワークショップと講義、実演の三本立ての講座を担当。約三百人収容の会場はいつも満席だ。約半数はフランス人、四分の一が近隣諸国から来た人で、残り

が日本人という。「三番叟」「田植」など五穀豊穰を祝い

願うといった日本の伝統芸能の源流に関わる曲目を選んで

る。日本人も参考にすべき姿勢と考える。



「パリはニューヨークと同様の発信拠点。狂言を世界に広めたい」と話す小笠原匡(大阪市)

おがさわら・ただし 1965年東京都出身。野村萬、故八世野村万蔵、九世野村万蔵に師事。86年初舞台。約20年前から大阪を拠点に活動している。舞台の傍ら、NHK大河ドラマ「義経」の芸能指導、同連続テレビ小説「ごちそうさん」の所作指導なども務める。2015年、主催公演「延年之會」を立ち上げた。パリ日本文化会館での次回講座は5月12、13の両日、開場20周年を記念した特別公演を開催する。師の野村萬ら一門勢ぞろいで出演する。

ジャポニスム 裾野着々

教えている。

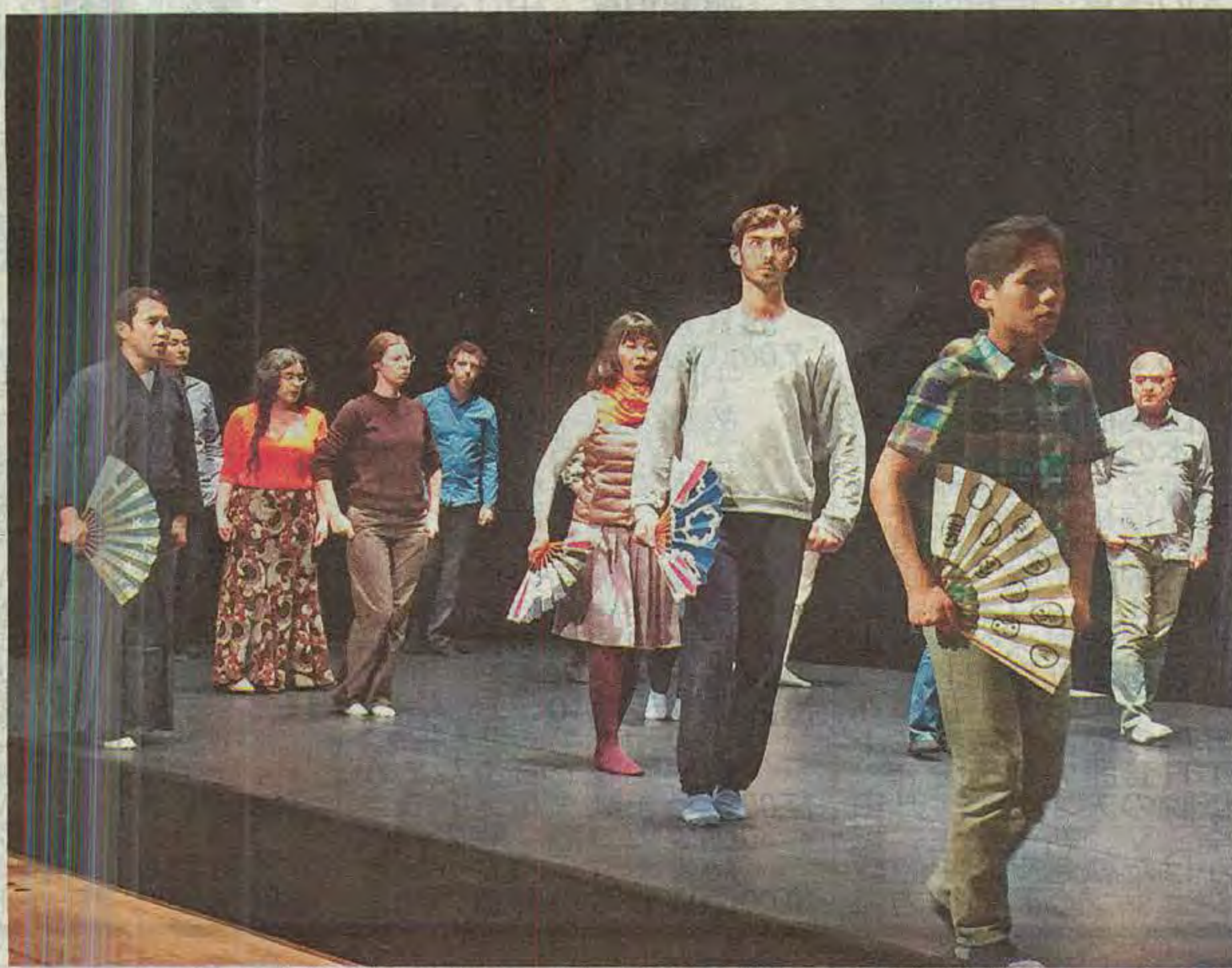
狂言だけでなく、文楽の技芸員や能楽師、囃子方ら数人を日本から毎回呼ぶ。人形や能面に触れられる貴重な「ジャポニスム」の場として徐々にパリの人の関心も広まっている。「継続することで裾野が広がってきた」と手応えをつかむ。

欧州と日本を行き来する中で、日本文化に精通した現地人とよく出会う。「母国の文化に精通した人こそ真の国際人なのではないか」と思うようになった。狂言を世界へ広めることに加え、国内各地でも子どもや初心者に向けた普及活動にも力を注いでいる。

「パリは欧州、世界への発信力がある。『ジャポニスム(日本趣味)』好きが多い場所ので狂言を披露することは意義深い」。パリで狂言の講義や実演を続けている和泉流狂言師の小笠原匡(五)はそう実感する。

一九九〇年代前半、狂言指導のアシスタントとして初めて渡仏した際、地元の舞台人が演劇と狂言の融合を柔軟に図ろうとする姿勢に感銘を受けた。「いつかここで舞台を学び、そして狂言を」と思った。たびたび欧州公演の機会があったが、念願がかなったのは狂言修業を始めていた長男弘晃(七)が三年前、縁あってパリの中学に留学してから。自身も折に触れて渡仏し、狂言など和の芸の普及に努めることになった。

大学などで謡や舞も含めた体験講座で指導するうち、評



2016年10月、パリでフランス人らに指導する小笠原匡(右)。右から2人目は長男弘晃(小笠原匡提供)

「静」の状態が目立つ能や狂言の舞台に「(演劇の)プロも驚いているようだ」という。セットもない舞台や独特の所作に「エキゾチックな様式美を堪能しているみたい」と感じる。通訳付きの講座だが「フランス人たちは言葉の意味を超えて、インスピレーションや想像力で鑑賞している」

(藤浪繁雄)